

REACT

2016年 6月号



相次ぐ病院爆撃 患者は標的ではない

アフガニスタン 外傷センターが廃墟と化した日

シリア “戦略的”に行われる医療施設への攻撃

国境なき医師団日本 定例総会・財務報告

派遣スタッフの声(イエメン)



迫力満点の360°動画で、人道援助活動を疑似体験。



「東京マラソンEXPO2016」にMSFブースが登場！

2016年2月25日～27日、東京ビッグサイトで開催された「東京マラソンEXPO2016」に、国境なき医師団(MSF)が出展。「Run for 国境なき医師団」をテーマに、活動地を映したバーチャリティーアクション動画や活動スタッフによる体験談などを通じて、MSFの活動をより多くの方に知っていただこうという試みです。MSFのロゴ「ランニングマン」が入ったマフラータオルと共に写真が撮れるコーナーには、3日間で2000人以上が参加。「マラソンよりも長い距離の山道を歩いて、“最寄り”の病院に向かう患者がいます」「安全に暮らせる場所を求めて、マラソンの何倍もの距離を歩き続ける難民がいます」という私たちの言葉に、多くの来場者が耳を傾けていました。



特定非営利活動法人 国境なき医師団日本

寄付や『REACT』に関するお問い合わせ

0120-999-199 (9:00～19:00 無休)

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 早稲田SIAビル3階
Tel : 03-5286-6123(代表)

www.msf.or.jp

『REACT(リアクト)』は国境なき医師団(MSF)日本が発行するニュースレターです。MSFが活動現場で目撲する世界の人道的危機と、命を救うための人道援助活動についてお伝えし、ともに考えていただくための情報をお届けします。

国境なき医師団は、1971年にフランスで設立された、非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機に瀕した人々との緊急医療援助を主な目的とし、医師、看護師をはじめとする約7000人以上の海外派遣スタッフと、約3万1000人の現地スタッフが、約60の国と地域で活動しています(2014年度)。

アンケートのお願い

国境なき医師団の活動地の状況と活動内容をより分かりやすくお伝えするために、ぜひアンケートにご協力ください。郵送またはウェブサイトにて、ご回答いただけます。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で10名様にMSFオリジナルタオル(右写真)を差し上げます。



郵便はがきに、ご住所、お名前、年齢、職業、アンケートの回答をご記入のうえ、左記の住所までお送りください。2016年7月末日消印有効

宛先 国境なき医師団日本・広報部宛

Web トップページ→MSF図書館→読み物→『REACT』2016年7月末日まで受付
※お寄せいただいた個人情報はアンケート分析にのみ利用いたします。

○次の①～④には[ア そう思う イ そう思わない ウ どちらともいえない]から選択して、⑥⑦には自由回答でお答えください。

①世界の人道危機や医療ニーズへの理解は深まりましたか。②MSFの活動への理解は深まりましたか。③MSFは活動について十分に透明性をもって報告していると感じますか。④今後もMSFを支援していくと思いますか。⑤特に印象に残った記事を2つ教えてください。⑥ご意見・ご感想を自由にお聞かせください。⑦MSFへの支援に込める気持ちをお聞かせください。

命を脅かす医療施設への攻撃に抗議の声を上げていきます

2015年10月3日、国境なき医師団(MSF)がアフガニスタンで運営する病院が米軍による空爆を受け、患者・スタッフ合わせて42人が死亡するという陰惨な事件が起きました。同様に、その他の活動地においても、医療施設が繰り返し被害を受けています。攻撃による直接の犠牲のみならず、地域医療が失われることにより、過酷な生活を強いられている人びとの命が、さらなる危機にさらされていることは憂慮すべき事態です。MSFはすべての当事者と交渉を続け、医療援助を届けるための道を模索し続けています。

MSFが運営・支援する医療施設への攻撃

2015年

10月3日 アフガニスタン・クンドゥーズ州の外傷センターに爆撃。患者・MSFスタッフ42人が命を奪われ、外傷センターは閉鎖に。

10月26日 イエメン・サアダのハイダン病院に爆撃。MSFスタッフ1人が避難中に負傷。

10月29日 シリア・首都ダマスカス近郊のドゥーマ仮設病院に爆撃。15人が命を落とし、100人以上が負傷した。翌30日、病院の近くの市場が爆撃されて70人以上が死亡、550人以上が負傷。

11月19日 シリア・エルビン市でMSFの支援先病院にミサイル2発が着弾。2人が命を落とし、病院の建物や救急車が損壊した。

12月2日 イエメン・タイズのフーバン地区でテント式の移動診療所が被弾。スタッフ2人を含む8人が負傷し、1人が死亡した。

2016年

1月10日 イエメン・ラゼーでシアラ病院に爆撃。6人が命を奪われ、7人以上が負傷。

1月21日 イエメン・サアダのジュムフリ病院の救急車が空爆で被弾。運転していた保健省スタッフが命を落とした。

2月5日 シリア・ダラーエ県のタファス野外病院に爆撃。3人が死亡、6人が負傷した。

2月15日 シリア・イドリブ県でマアラト・ヌマン病院に爆撃。患者・スタッフ計25人が死亡。

4月27日 シリア・アレッポ市のアルクッズ病院に爆撃。6人の医療スタッフを含む55人が死亡。

上記は5月3日時点の情報。このほか、MSFの運営・支援先ではない複数の医療施設も爆撃を受けたことが報告されています。

Web

特集：“手違い”ではすまされない——医療施設への攻撃 www.msf.or.jp/news/detail/special_2741.html



今年5月3日、国連安保理で演説するジョアンヌ・リュー MSFインターナショナル会長。この日、医療人道援助活動の安全確保を求める決議案が全会一致で採択された。

“ 医療の保護を定めた
国際人道法の著しい侵害です

フランソワーズ・ブシェ=ソルニエ
(MSFフランス事務局法務ディレクター)

「戦地の医療活動は国際人道法で保護されており、1949年ジュネーブ条約でも正式に記載されています。また故意による病院への攻撃は、国際人道法のみならず国際刑事裁判所規程によつても戦争犯罪とみなされます」

国際人道法に基づく「医療保護」の原則

医療施設・医療要員

医療施設や医療のための輸送、医療要員はいかなる条件下でも常に尊重され、保護されなければならない。

傷病者

負傷の経緯や、戦争のいずれかの陣営に属していたか否かに関わらず保護されなければならない。

医療任務・医療倫理

医療要員は軍の干渉に抵抗し、独立性・自律性をもち、医療上の必要性に基づいて治療する義務を負う。

“ 外傷センターを失い、
現地の医療不足は深刻です

ギレム・モリニ(MSFアフガニスタン代表)

「MSFは事前にすべての紛争当事者と話をして、医療スタッフ、患者、病院、救急車の安全を確保する約束を取り付けていました。アフガニスタン北東部で唯一、専門治療の行える病院を失い、大勢の住民が医療を受けられない状況が続いている」



“ 変わりつつある戦争の
方法論への対応が急務です

ブルーノ・ヨッフム(MSFスイス事務局長)

「過去半年以上にわたり、政府軍や有志連合軍によって、度重なる病院爆撃が行われています。インフラを奪い、敵地にダメージを与えるための戦法として病院を攻撃するトレンドに対し、危機感を覚えています」



“ 変わりつつある戦争の
方法論への対応が急務です

ブルーノ・ヨッフム(MSFスイス事務局長)

「過去半年以上にわたり、政府軍や有志連合軍によって、度重なる病院爆撃が行われています。インフラを奪い、敵地にダメージを与えるための戦法として病院を攻撃するトレンドに対し、危機感を覚えています」



イエメンでは2016年1月までの10ヶ月間で、130件以上の医療施設が攻撃された。全壊したラゼーのシアラ病院。



2016年4月の爆撃で破壊されたシリア北部・アレッポのアルクッズ病院。

2016.6 CONTENTS

ACTIVITY NEWS

アフガニスタン

4 外傷センターが廃墟と化した日

シリア

5 “戦略的”に行われる
医療施設への攻撃

イエメン

6 黙認される爆撃——
当事者は説明責任を

南スーダン

病院が略奪被害に

バルカン諸国 IN FOCUS

8 国境閉鎖、行き場を失う
移民・難民たち

日本

10 カフェと診療所、
それぞれの未来へ

日本

11 研究開発チーム始動
ビジネスパートナーも募集

VOICE 派遣スタッフの声

松本 明子(看護師長・病院マネジャー/イエメン)

定例総会のご報告

12 2016年 国境なき医師団日本 定例総会
2015年度 国境なき医師団日本 財務報告

14 支援者のひろば

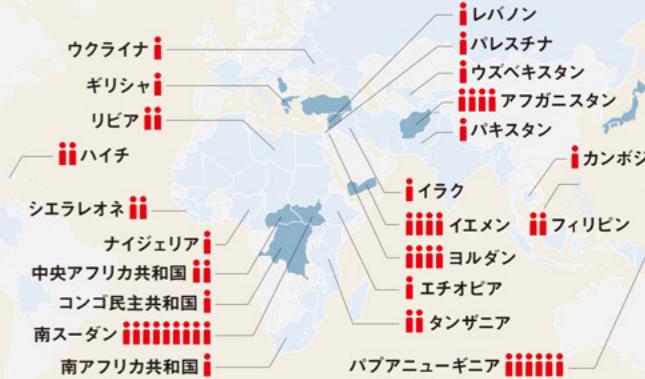
Field Stories フィールド・ストーリーズ

15 岩川 真由美(小児科医/中央アフリカ共和国)
堀 正貴(ロジスティシャン/コンゴ民主共和国)

今号掲載国

国境なき医師団の活動国・地域

i MSF日本からの派遣者数(23ヵ国・50人/2016年5月9日現在)





国境閉鎖、行き場を失う移民・難民たち

中東やアフリカから欧州への移民・難民の移動が続く中、今年2月、バルカン半島西部ルートで、アフガニスタン国籍の人を対象とした国境通過が、突然、規制されました。さらにルート上の各国が独自の規制を実施し、この結果、数千人が各地で足止めされています。ギリシャ・マケドニア間の国境に位置するギリシャのイドメニ村からは、何百人のアフガニスタン人がアテネへ強制送還されました。しかしアテネの受け入れ施設も既に限界を超え、施設に入れない人が増加する一方です。この新規制に関する説明はなく、人道援助もほぼ行われていません。国境なき医師団(MSF)はイドメニ村で、暴力による負傷者100人以上を治療しました。その中には、マケドニア警察がけしかけた犬にかまれたと訴える人もいました。さらに3月20日以降はEU-トルコの合意により、ギリシャからトルコへの強制送還が始まり、行き場を失った人々とは、さらなる危機に直面しています。



研究開発チーム始動 ビジネスパートナーも募集

国境なき医師団(MSF)日本事務局では、主に資金調達、人材の募集・派遣や広報・アドボカシー活動などを担ってきましたが、2015年4月、R&D(研究開発)・調達部門が誕生。MSFの活動で必要とされる製品や技術をモノづくり大団から見つけ出し、研究開発や技術革新、物資調達を行っています。発足から1年、チームの課題や今後の展望をお伝えします。



1 MSFが2014年にパプアニューギニアで実施した、小型無人機のテスト飛行の様子。患者の痰のサンプルをアクセスの悪い遠隔地から町の病院へ運び、結核検査に活用した。
2 3D印刷とバーチャルリアリティ技術を生かした病院設計の試みも。病院建設前に使い勝手や動線を検討し、業務を仮想体験することでスタッフの事前研修などが可能に。

紛争や自然災害など、医療へのアクセスのない場所で援助を提供しているMSF。医療の質についても妥協せず、高いスタンダードを設けています。しかし、人手や物資、インフラが限られる活動地において、先進国で使われている製品・技術そのまま持ち込むことは、有用性や使い勝手、コスト面で難しいことがほとんど。そこで、厳しい条件下でも使用できる医薬品や医療機器、その運搬方法などを見つけ、実用化するためのチームが昨年発足しました。

新しい製品・技術を掘り起こす役割は他の事務局にありました。日本は世界を含むアジアの製品までカバーしきれていませんでした。日本は世界有数の製薬企業やトップクラスの大企業・学術機関があり、技術研究開発が進んでいるにもかかわらず、MSFの現場でもあまり使われていないのが現状です。新チームは、活動地のニーズと、日本で入手・開発可能な製品・技術とのマッチングを担います。

医療担当の看護師、京窓美智子が着目するのは、新生児ケアのニーズ。「低体重の赤ちゃんは無呼吸発作のリスクが高く、放つておけば死に至ることもあります。先進国では、心拍・呼吸モニターで早期発見し対処しますが、コストが高く操作が複雑な



©Sean Broekhuizen

震災から5年。国境なき医師団(MSF)が緊急援助活動を終え、引き継いだ活動と施設は、いまなお地元の方々に大切に利用されています。震災から5年。国境なき医師団(MSF)が緊急援助活動を終え、引き継いだ活動と施設は、いまなお地元の方々に大切に利用されています。

カフエと診療所、それぞれの未来へ

傾聴と見守りのテントカフエ

MSFは南三陸町での医療活動に加え、2011年4月に、臨床心理士が常駐する「カフエあづま」を開設。6月までに約2200人が利用しました。

引き継ぎ先の南三陸町社会福祉協議会は7月から同町歌津でカフエを再開。心理ケアは東日本大震災心理士会へと受け継がれています。

MSFが開始した臨床心理士という立場を前面に出さない傾聴の姿勢を見守りの姿勢を基本としています」と臨床心理士の佐々木美奈子さん。協議会の猪又隆弘事務局長は、「公営住宅等への入居が始まり、2年後には仮設住宅もなくなるでしょう。カフエも2年かけて、老人福祉センターに移します。今後も人びとの寂しさを受け止めながら、その役割は被災者支援から生きがいづくり支援へと変わります」と話します。

宮古市田老でも、MSFは震災直後から、移動診療と心理ケアを開始。同年12月には「グリーンピア三陸みやこ」の2階に、診療室ほか7室を備えた仮設田老診療所を完成させ、宮古市に寄贈しました。

建設時、MSFと建築業者さん、医師や看護師たちで検討を重ねて設計しました。機能的に動線が整つていて、とても使い勝手がいいのです」と診療所のスタッフは話します。

所長の橋本祥弘医師によると、患者の大半は地区に残る高齢者で、高血圧症などの慢性疾患が多いとのこと。中坪清見事務長は、田老のこれからを、こう話します。「新しい町への移転完了には、まだ時間がかかります。診療所も、やっとという思いです。MSFから寄贈された医療機材は十分使えるため、一部を除いて、ほぼすべて新診療所でも利用します」

共同設計した仮設診療所

「日本製の四輪駆動車は世界各地の活動地で信頼されていますが、医薬品や機器はまだまだ少ない印象です」と語るのは、調達の宮澤明子。「日本企業にも途上国も含めた海外市場に目を向けていただけるといいますね」と期待を寄せています。

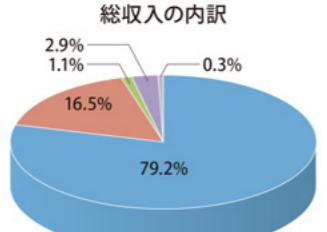


2015年度 国境なき医師団日本 財務報告

MSF日本は、パートナー事務局の1つとして、活動現地での援助活動にあたるオペレーション事務局からの資金ニーズ、および海外スタッフ派遣という人的ニーズに応じるべく活動しました。10月にはアフガニスタン・クンドゥーズ州の外傷センターが空爆の標的となり、それ以後もさまざまな武装勢力からの攻撃という危機に直面する中で、MSFは人びとに医療・人道援助を届ける努力を続け、世界60以上の国・地域で活動を開展しています。

総収入は82.9億円（前期比17.6%増）でした。

総収入の内訳は、民間からの寄付収入が80.4億円、うち7.2億円は非資金項目である現物寄付でした。ほかに、外務省からの助成金として2.4億円、およびその他の収入となります。

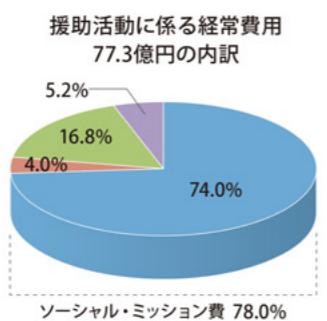


支援者数	内容
271,124人	一般個人支援者数
9,941社	一般法人支援社数
2,133団体	その他支援団体数
283,198	延べ支援者総数

支援者総数は、前年比で5%減少しました。寄付金以外にも、左記の通り、現物および役務・サービスのご提供という形でのご支援を数多くいただきました。

援助活動に係る総支出は77.3億円（前期比11%増）でした。

MSF日本の、2015年度の活動別の支出内訳は、右の通り。援助プログラム支援金は1.7%増え、49.2億円。ほかに、MSF関連団体に6.7億円相当の現物寄付を行いました。活動地スタッフの募集活動、本年から開始した研究開発・調達、広報・アドボカシー活動費と合わせた、ソーシャル・ミッション支出は15.7%増え、計60.3億円。ソーシャル・ミッション・レシオ（総活動費に占める割合）は78.0%で過去最高となりました。



Category	Amount (百万円)
① 援助活動費	5,726
・人道援助プログラム支援金	4,927
・国内外でのプログラム・サポートなど	799
② 広報・アドボカシー活動費	309
③ ソーシャル・ミッション費計(①+②)	6,035
④ 募金活動費	1,301
⑤ マネジメントおよび一般管理費	399
援助活動に係る経常費用合計	7,736
(③+④+⑤)	

MSF日本の財務上の基本方針

MSF日本は、MSFが世界各地で展開する医療・人道援助活動に対して人材面・資金面で積極的に関わること、および援助活動地の人びとが置かれた窮状を自らとして広く社会に情報発信することを最大の使命とし、これらの活動に重点的に経営資源を配分しております。人道援助活動と広報証言活動という、2つの使命の遂行に要する費用を、ソーシャル・ミッション費と称し、同費用が総費用に占める比率（ソーシャル・ミッション・レシオ）を経営の効率性の尺度としています。MSFの活動は寄付金に依存しており、人道援助活動のニーズに柔軟に対応するためには、必要・十分な寄付収入をいかに確保するかが課題となります。世界には命の危機に瀕しながらも援助が得られない人びとが大勢いることを広く周知し、MSFの援助活動への理解・ご支援をできる限り多くの方々に訴えることも人

道援助活動の一環であると、MSF日本は考えます。また今後予想される資金ニーズの拡大に対応するため、新たな支援者を獲得するための働きかけも積極的に推進しています。

一方、長期的な観点から、突発的大規模災害発生時の緊急援助活動にも迅速かつ円滑に対応できるよう、一定水準の剩余金を蓄積することで財務基盤の安定化を図っています。

「1円でも多くの寄付金を現地へ送ってほしい」という支援者の皆さまの切実な声をしっかりと胸に刻み、MSF日本では鋭意、コスト削減をベースとした、さらなる効率経営の実現に取り組むとともに、その成果を明瞭に開示し、透明性を確保することを心掛けています。

●国境なき医師団は活動と財務の透明性と説明責任を重視しています。

監査法人による厳正な監査を経た会計報告を公開する年次報告書を毎年発表。

4月発行の『活動報告書2015年度版』を公式ウェブサイト(www.msf.or.jp)下段【MSF図書館】から閲覧・ダウンロードできます。
郵送ご希望の方は、Webトップページ下段の【資料請求】から。◎お電話でも承ります。Tel:0120-999-199 (9:00~19:00 年中無休)



2016年 国境なき医師団日本 定例総会

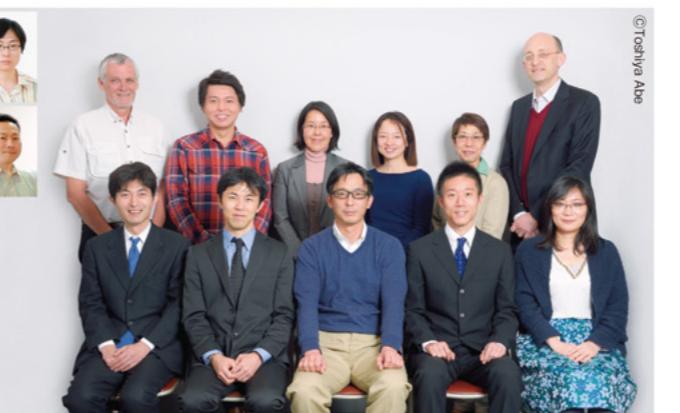
3月19日、20日にかけ、東京・恵比寿において、国境なき医師団（MSF）の2016年総会が開催されました。総会は、MSF日本の活動に関する最高意思決定の場であると共に、MSFの活動経験者を中心とする会員が集う、年に一度の貴重な交流の場です。



各国のパネリストを交えたディスカッションの様子。

今回の総会ではMSF日本の2015年度の活動と財務に関する報告・承認と役員改選を行い、会長には加藤寛幸医師が再任されました。今年度の役員の顔触れは下段の通りです。

クンドゥーズに関するパネル・ディスカッションでは、外部の識者やオペレーシヨン事務局長、活動責任者が参加。医療施設への攻撃が人道援助活動に与えるインパクトや国際人道法の意義、今後るべき対策について、専門家、活動地、事務局の担当、MSF会員、各々の視点から、活発な議論が交わされました。



前列左より：須田洋平、渥美智晶、加藤寛幸、安藤恒平、篠崎康子
後列左より：ジル・デルマス、森山秀徳、沢田さやか、青池望、黒崎伸子、フレデリック・ヴァラ
左上枠内：リー・ヒヨミン 左下枠内：鈴木基

理 事

会長	加藤 寛幸 Hiroyuki Kato MD
副会長	渥美 智晶 Tomoeiki Atsumi MD
副会長	安藤 恒平 Kohhei Ando MD
専務理事	篠崎 康子 Yasuko Shinozaki MD
会計役	青池 望 Nozomi Aoiike MD
	沢田 さやか Sayaka Sawada
	ジル・デルマス Gilles Delmas
	鈴木 基 Motoi Suzuki MD
	須田 洋平 Yohei Suda
	森山 秀徳 Hidenori Morigama MD
	リー・ヒヨミン Hyomin Lee MD

監 事

黒崎 伸子 Nobuko Kuroasaki MD
フレデリック・ヴァラ Frederic Vallat

また別のセッションでは、MSF日本の研究開発ユニットが登壇し、医療とジステイックの両面から高品質で低価格な製品を実現する研究内容について発表。出席者からは、日本の技術力を生かした新製品の提案も行われました。

3月19日、20日にかけ、東京・恵比寿において、国境なき医師団（MSF）の2016年総会が開催されました。総会は、MSF日本の活動に関する最高意思決定の場であると共に、MSFの活動経験者を中心とする会員が集う、年に一度の貴重な交流の場です。



加藤 寛幸

Hiroyuki Kato
1965年、東京都出身。小児科医。専門は小児救急、熱帯感染症。島根医科大学卒業、タイ・マヒドン大学にて熱帯医学ディプロマ取得。東京女子医大病院、オーストラリアの小児病院、静岡県立こども病院などに勤務。MSFには2003年より参加し、東日本大震災緊急救援、南スー

ダン、エボラ緊急救援（シエラレオネ）などで活動。2015年3月にMSF日本会長就任。

REACT 12



中央アフリカ共和国
コンゴ民主共和国

フィールド・ストーリーズ

人道援助の現場で出会った人ひととの交流、明日への活力源となった出来事など。
国境なき医師団(MSF)のフィールドでの活動中に、スタッフが出会ったストーリー。



試験を通過したスタッフと記念撮影。良かった！



現地スタッフはみなフレンドリー。



アフリカど真ん中で、「マユミアディク！」

岩川 真由美 小児科医
Mayumi Iwakawa 中央アフリカ共和国

中央アフリカ共和国で小児科医として医療援助活動に従事しました。マラリアや栄養不良で苦しんでいるのは、クリクリした瞳のかわいい子どもたちです。毎日、緊急で運び込まれる子どもたちを治療するのはもちろんですが、現地の医療スタッフへの訓練も大切な活動です。現地スタッフは、この国の公用語であるフランス語が話せることが条件です。それは私も同じ……でも実は、私にとって初めて初めてのフランス語活動地域への派遣でした。そこで、私は現地の医師・看護師長に訓練・講義のアシスタントをお願いしました。彼らは、フランス語に加えて、現地のサンゴ語を交え、私のつたないフランス語を補ってくれました。「真由美が言いたいのは……」(Mayumi a dit que...)で始まるフレーズは、すっかりみんなの合言葉・流行語となり、私の周りではいつも「マユミアディク」の大合唱でした。思いがけず、この訓練内容の繰り返しが大きな学習効果を生んで、スタッフの技術が向上しました。講義と実習が終了したら、そのあとは、テストをします。長い勉強を終え、難しいテストに合格したスタッフに受講完了証書をプレゼントする瞬間は最高です！



国籍、文化、宗教の異なる仲間たちとの共同生活

堀 正貴 ロジスティシャン
Masataka Hori コンゴ民主共和国

今回の4ヶ月にわたる活動で与えられた業務は、調達システムの構築でした。アフリカでの現地調達は、業者との直接交渉で行われます。着任後、70件ほどの業者を戸別訪問し、交渉から契約までを行いました。同時に、不正取引ができないよう履歴を残せるシステムをつくり、取引金額のデータ管理ができるようにしました。仕事の効率と支払いの透明性が上がり、現地スタッフから評価を得る結果となりました。

現地ではアパートで3人のスタッフと共同生活をしました。電気や水がよく止まるうえに、菜食主義や偏食、宗教上の規制などのある人たちがキッチンを共有するため、仕事よりも帰宅の方がストレスを感じることも。多国籍集団であるMSFならではの軋轢はありましたがあまりましたが、そこから学ぶことのほうが多い多かったと思います。



週末は、同僚のアパートに集まって交流。

事務局より

都内で医師向け外科セミナーを開催

2016年7月に外科医・整形外科医・産婦人科医・麻酔科医を対象としたセミナーを開催します。MSFの医師たちはどのような外科治療を行っているのか、現地で活動に参加した医師がその経験をお話しします。

日時：2016年7月10日（日） 11:00～18:10

会場：エムワイ貸会議室高田馬場 ルームC

予定セッション：

トリアージ／戦傷外科／創外固定／産科医療（帝王切開、弛緩出血など）／フィールドの麻酔／熱傷治療

パネル・ディスカッション：

キャリア形成／語学とコミュニケーション ほか

ゲスト・スピーカー：

中出雅治氏（大阪赤十字病院国際医療救援部・外科医）

MSFファシリテーター：黒崎伸子（外科医）

参加費：無料（要申込）

定員：100人（定員に達し次第受付終了）

申込：MSF公式サイト（www.msf.or.jp）内「外科・整形外科・産婦人科・麻酔科セミナー」ページから申込フォームへアクセス



国境なき医師団

支援者のひろば



『REACT』2015年12月号の読者アンケートで、国境なき医師団(MSF)への支援に込める気持ちについてお尋ねしたところ、心温まるメッセージを多数いただきました。誠にありがとうございました。
皆さまから託していただいた大切な思いは、私たちスタッフにとって何よりの励ましです。
すべてを掲載できないのが大変残念ですが、引用してご紹介させていただきます。

滋賀県 石川 陽二様

MSFで活動していた医師と私の兄が小学校時代に同じクラスで、小学校の調べ学習を当時一緒にやっていた事などよく聞かされていました。世界貢献されている様子を拝見させていただいて、とてもうれしく思います。私は高校教員として生物基礎の授業で、MSFのワクチンを届ける活動について紹介させていただいています。私の学校からも年に数名は医療系に進学します。教育現場でMSFの活動の様子とその意味を、命の大切さとともに生徒達へしっかりと伝え、将来、1人でも多くMSFに参加する生徒を輩出したいです。



ご自身の授業でMSFの活動を伝えてくださっていること、大変ありがとうございます。いつか卒業生の方がMSFに参加してくださり、私たちと一緒にフィールドで働いてくださることを楽しみにしています。これからも、世界の人道的危機や活動内容について情報を発信してまいりますので、引き続きお役立ていただければ幸いです。



あなたの街でお会いしましょう

街頭
キャンペーン
実施中

街頭での活動が始まってから、もうすぐ2度目の夏。東京都内1カ所からスタートした街頭キャンペーンは、首都圏、関西、名古屋そして九州まで地域を拡大し、MSFのご紹介と毎月の寄付へのご参加をお願いする活動を続けています。

20代から50代まで総勢50人以上のキャンペーンスタッフは、元教員、スポーツ選手など、さまざまな個性を生かして共感の輪を広げています。スタッフにとって街頭は、命の危機に直面する人びとと日本の皆さまの気持ちをつなぐ最前線。アフガニスタン病院爆撃の後は心配と励ましの言葉をいただいたり、夏の炎天下や雪の降る中での活動で体調を気遣っていただたりと、皆さまの優しさを実感し、勇気をいただく場もあります。街で見かけられたら、どうぞお気軽に声掛けください！



寄付に関するくわしい情報はこちらから

Tel 0120-999-199

（通話料無料、9:00～19:00 無休）

Web www.msf.or.jp



教えるはずの、多くの命のために。
遺産や相続財産からの寄付で、その遺志は希望に変わります。

遺産や相続財産の有意義な活用のために、MSFへの寄付を選ぶ方が増えています。パンフレットをご希望の方は、下記のウェブサイトまたはお電話にてお申し込みください。MSF日本に寄付していただいた遺産は非課税扱いとなります。

Web www.msf.or.jp
(トップページ下段 → 資料請求)

Tel 0120-999-199
(9:00～19:00 無休)